

いよいよ、明後日 26 日（日）のサッカー競技を皮切りに、5 月 31 日（金）～6 月 4 日（火）にわたり、県内 3 2 の会場で高校総体が開催される。生徒諸君にとって、高校総体は、これまでの練習の成果を問う総決算としての特別な大会である。各種目、各会場において、好ゲームが展開されることを期待する。

また、放送部は、6 月 9 日に開催される「NHK杯全国高校放送コンテスト佐賀県大会」に出場する。日ごろの練習の成果を存分に発揮し、全国の切符を掴み取ってもらいたい。さらに、今週末には「佐賀県高等学校スケッチ大会」が開催される。本校からは美術部の三年生・二年生併せて 1 4 名が出場する。特に三年生にとっては最後の大会ということで練習にも熱が入っているとのこと。本番では、納得のいく作品を仕上げたい。

小城高校の名を背負って、高校総体や各種競技会に参加する選手諸君に期待することは二つ。一つは準備を怠らないこと、もう一つは悔いを残さぬよう全力を尽くすことだ。

せっかくの機会なので、試合に臨む心構えについてアドバイスする。「2020、東京オリンピック・パラリンピック」の開会を 1 年後に控え、準備が急ピッチで進んでいる。君たちは、隈研吾（クマケンゴ）という人物を知っているか？この度のオリンピックには欠かせない人物だ。大会のメイン会場となる「新国立競技場」のデザイン・設計を手掛けているのが、和風建築の第一人者、隈研吾（クマケンゴ）氏である。「東京オリンピック」に関しては、ロゴマークや競技場の経費について「盗作ではないか」「金がかかりすぎる」等と物議が醸し出され、ロゴマークや競技場デザインの再募集という事態を招いた。とりわけ、デザインのやり直しコンペは、予算が当初より大幅に削減され、応募のための準備期間も僅か 2 か月間という非常に厳しい条件のもとで行われた。コンペに参加した隈さんチームは、時間や予算が厳しく制限される中で、「限界の中で最善を尽くす」という信念のもと、事務所総動員でコンペに勝利した。この「限界の中で最善を尽くす」という教訓を、高校総体に当てはめると、次のように考えることができるだろう。すなわち「こちらは限られた時間内で練習しなければならない」「もともと一人ひとりの能力に大きな差がある」等、たとえ試合以前に「限界」のようなものが感じられたとしても、その限られた中でいかに最善を尽くすかが勝敗を大きく分けるということだ。勝敗のいかんにかかわらず、悔いを残さないためにも、いろいろな理由をつけて、途中で、あるいは初めから諦める等ということは決してあってはならない。

また、今日では、情報が発達し、スポーツにおいてもデータに基づく情報戦が展開されるようになってきたが、その一方では、相変わらず「勝敗は時の運」とも言われている。やはり「運」をいかに味方につけるかが勝敗のポイントである。

では、どうすれば、幸運の女神が微笑むか？隈さんの言葉を借りるとこういうことだ。「運をつかむには、何事もポジティブに受けとめる姿勢はとても大事である。ただ、ポジティブといっても、決して肩肘を張って頑張ることではない。一生懸命であることは大切だが、『負けないぞ！大変だぞ！』と身構え過ぎると、逆に運は遠ざかってしまう。むしろ、あまり力まず、かといって落ち込んだり腐ったりせず、明るく前向きに頑張っていくことで、運は自然に呼び寄せられるように感じる」と。実際、隈さんの場合、重要な仕事は、殆どコンペ（競技会）で決まることが多いという。どんなに良い案を提出しても、運がないと勝つことができないそうだ。「勝ちに不思議の勝ちあり。負けに不思議の負けなし」と言う。これは、勝つ場合は「運」という偶然が作用し、負ける場合は、「運」とは無関係に、負けるべくして負けてしまうということである。運を味方につけることができれば、10人力、100人力ではなからうか。

最後に生徒諸君に願います。ちょうど1年前、日大アメフト部の反則行為が連日のようにマスコミに取り上げられ、反則行為そのものに非難の声が集中したことは記憶に新しい。スポーツの語源は、ラテン語の「レポルターレ」、意味は「楽しむ、遊ぶ」という意味である。皆で楽しみながら運動することがスポーツの基本である。選手の皆さん、高校総体や全国大会出場をかけた大舞台で、フェアプレーの精神に則り、相手への敬意を持って最高のパフォーマンスを見せて欲しい。

また、選手以外の皆さんは、試合会場に出かけて、他校の応援に負けないよう大きな声を出して小城高の仲間をしっかりと応援して欲しい。

輝く小城高生の健闘を祈る！